「教育臨床総合研究８　2009研究」

学校教育実習プログラムの評価と検証
－ 2005年度入学生に対する継続的な意識調査を通して －

A Research on Effect of Student-Teaching Program

岩田耕司*　川路澄人**
Koji IWATA　Sumito KAWAJI
池山圭吾***　佐々有生****
Keigo IKEYAMA　Sumio SASA
林高宣*****　原丈貴******
Takanori HAYASHI　Taketaka HARA
廣兼志保**　福間敏之***
Shiho HIROKANE　Toshiyuki FUKUMA
舟木賢治*******　諸岡了介********
Kenji FUNAKI　Ryosuke MOROOKA

要　旨

島根大学教育学部では，平成16年度より，従来の教育実習系カリキュラムを抜本的に見直し，学部４年間で継続的な資質力量の向上を目指す「学校教育実習プログラム」を構築した。本稿では，平成17年度入学生（平成20年度卒業生）に対する意識調査の結果から，１年次から４年次までの４年間にわたる学校教育実習プログラムの評価と検証を行った。

Ⅰ．はじめに

平成16年度より，島根大学教育学部（以下，本学部という）は，教員養成に特化した学部として改組された。この改組再編に伴い，本学部では，従来の教育実習系カリキュラムを抜本的

*島根大学教育学部数理基礎教育講座
**島根大学教育学部初等教育開発講座
***島根大学教育学部附属教育支援センター
****島根大学教育学部芸術表現教育講座
*****島根大学教育学部言語文化教育講座
******島根大学教育学部健康・スポーツ教育講座
*******島根大学教育学部人間生活環境教育講座
********島根大学教育学部共生社会教育講座

に見直し，学部４年間で継続的な資質力量の向上を目指す「学校教育実習プログラム」を構築した。学校教育実習プログラムでは，１年次から４年次までの各学年に，それぞれの学年段階に応じた教育実習プログラムが設定されており（図１および表１を参照），３年次までの各プログラムに関しては，その概要や効果，課題等の観点から，既に幾つかの研究報告を行ってきている（例えば，畑・森本，2005；川路ほか，2005；高旗ほか，2005；間瀬ほか，2006；川路ほか，2007；高旗・岩田ほか，2007）。

本稿では，平成17年度入学生（平成20年度卒業生）に対して行った継続的な意識調査の結果から，４年間にわたる学校教育実習の教育効果について，主に次の３つの側面から検討する。

１）学校教育実習を通して，学生の教職志向はどのように育まれたのか。

２）学校教育実習は，学生のどのような力を育てたのか。

３）教育実習の最終プログラムとしての学校教育実習Ⅵの成果と課題。

このような評価・検証を行うことにより，学校教育実習プログラムに対する改善への示唆を得ることが本稿の動機・目的である。

Ⅱ．調査の概要

本学部では，１年次から４年次まで，全ての学年に設定した学校教育実習プログラムの終了時に，そのプログラムに対する学生の達成度と教職志向にかかる意識調査を実施している。平成17年度入学生を対象とした調査の実施時期は，次の通りである。

１年次前期：学校教育実習Ⅰ（幼・小・中での１週間の観察実習）終了時（2005年７月）

２年次後期：学校教育実習Ⅱ（各専攻に応じた20時間の観察実習）終了時（2007年２月）

３年次前期：学校教育実習Ⅲ（各専攻に応じた１週間の観察実習）終了時（2007年７月）

３年次後期：学校教育実習ⅣおよびⅤ（３＋１週間の教壇・観察実習）終了時（2007年12月）

４年次前期：学校教育実習Ⅵ（１週間の教壇・観察実習）終了時（2008年５月）

各調査における質問項目は，各プログラムがねらいとしていることを中心に構成され，学生に対する自己評価や振り返りの意味合いも持たせている。あわせて，各時期における学生の教職への志向についても回答を得た。本稿では，まず，平成17年度入学生の１年次から４年次までの教職志向の経年変化を概観してみたい。

<table>
<tr><th rowspan="2">開講期</th><th colspan="2">１　年　次</th><th colspan="2">２年次</th><th colspan="2">３　年　次</th><th colspan="2">４　年　次</th></tr>
<tr><th>前　期</th><th>後　期</th><th>前期</th><th>後期</th><th>前　期</th><th>後　期</th><th>前　期</th><th>後　期</th></tr>
<tr><td>コア授業科目</td><td colspan="2">学校教育実践研究Ⅰ
（30時間）</td><td colspan="2"></td><td colspan="2">学校教育実践研究Ⅱ
（30時間）</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>体験活動内容</td><td>学校教育実習Ⅰ
（20時間）</td><td></td><td colspan="2">学校教育実習Ⅱ
（20時間）</td><td>学校教育実習Ⅲ
（８時間×５日間
＝40時間）</td><td>学校教育実習Ⅳ
（８時間×20日
＝160時間）
学校教育実習Ⅴ
（８時間×５日間
＝40時間）</td><td>学校教育実習Ⅵ
（８時間×５日間
＝40時間）</td><td></td></tr>
</table>

図１．「学校教育体験」領域の体系と流れ（畑・森本，2005，p. 7）

表１．「学校教育体験」領域の授業科目と体験活動内容（畑・森本，2005，p. 7）

分類	授業科目	内容
コア授業科目	学校教育実践研究Ⅰ（１年通年・30時間）	学校教育実習Ⅰのコア授業科目として事前事後指導を行う。幼稚園児から中学生までの子どもを「成長」、「発達」の総体として理解し、子どもたちとの豊かな関わりに必要なプレゼンテーションスキルを磨く。
	学校教育実践研究Ⅱ（３年通年・30時間・２単位）	学校教育実習Ⅲ・Ⅳのコア授業科目として事前事後指導を行う。主専攻に対応する校種・教科の授業実践に焦点化し、学習者理解を基本とした授業分析、教材研究と教材制作のトレーニング、学習指導案作成と模擬授業を行う。また事後指導では自らの実習を深化・発展させるためのふりかえりを行う。
体験活動内容（実習科目）	学校教育実習Ⅰ（１年前期・20時間）	附属学校園で５日間の観察参加実習を行う。子どもたちとのふれあい体験や授業（保育）観察を通して、「教師としての立場」から学校を把握し、教職への理解を深める。
	学校教育実習Ⅱ（２年通年・20時間）	附属学校で教科指導を中心とした観察実習を行う。主専攻に対応する校種・教科の授業観察を行い、ポートフォリオを作成するとともに模擬授業演習を行い、授業設計の基礎を培う。
	学校教育実習Ⅲ（３年前期・40時間・１単位）	主専攻に対応した学校教育実習。観察参加主体の実習。附属教員の授業観察を通して、授業を「教師と学習者のコミュニケーションの総体」として把握し、学校教育実習Ⅳに必要な授業実践力の基礎を培う。
	学校教育実習Ⅳ（３年後期・160時間・４単位）	主専攻に対応した学校教育実習。教壇実習主体の実習。教科指導に力点を置くとともに、道徳、特別活動等にも取り組む。学習集団の形成や学級経営に係る実践的トレーニングを行い、教職へのより深い理解と基礎的な実践力の育成を図る。
	学校教育実習Ⅴ（３年後期・40時間・１単位）	異校種に対応した学校教育実習。学校教育実習Ⅲ・Ⅳと異なる校種において実施する。学齢期にある子どもを「成長」、「発達」の総体と捉え、より豊かな子ども理解を促す。
	学校教育実習Ⅵ（４年前期・40時間・１単位）	次の３つの内、１つを選択する。 ①主専攻に対応した学校教育実習 ②副専攻に対応した学校教育実習 ③教育実践・実習開発センターにおいて開講される演習科目 なお、履修する際は、次の点に留意すること。 １．①について、副専攻で免許取得を希望しない者は、主専攻を深めるために学校教育実習Ⅲ・Ⅳと同校種において履修すること。 ２．②について、異校種の副免を取得する者は、学校教育実習Ⅴと同校種において履修すること。 また、教科専攻生で他教科を副専攻とした者は、学校教育実習Ⅲ・Ⅳと同校種において、原則として副専攻教科で履修すること。 ３．③の演習科目を履修した場合は、単位換算を行わない。

Ⅲ．平成17年度入学生の教職志向の経年変化とその要因

１．教職志向の経年変化

本学部では，前述の意識調査において，以下の３つの設問[1)]を含め，学生の教職志向を「教師になりたいと考えているか否か」，「教員採用試験を受験しようと考えているか否か」，「教職に魅力を感じているか否か」という３つの指標で捉えている。

問１．あなたは現在，「教師になりたい」と考えていますか？

問２．あなたは現在，教員採用試験を受験しようと考えていますか？

問３．あなたは「教職」というものに，どの程度の魅力を感じていますか？

次の図２から図４は，各設問に対し，肯定的な回答を示した学生（例えば，問１の場合，「とてもなりたい」，「なりたい」と回答した学生）の比率の推移を示している。なお比較対象として，平成16年度入学生（平成19年度卒業生）のグラフも併記した。

また，図２’から図４’に示すグラフは，同様の比率について，学生が専攻する校種に応じた傾向の違いを調べるために，主免実習の実習校が小学校である専攻（初等系と表記）と，主

免実習の実習校が中学校である専攻（中等系と表記）とに分けて示したものである。なお，平成17年度入学生の１年次における専攻ごとの人数構成は，表２に示す通りである。

表２．平成17年度入学生 専攻別学生数（１年次）

	専攻名	人数	
初等系	初等教育開発	48	72
	心理・臨床	12	
	特別支援教育	12	
中等系	国語教育	15	97
	英語教育	9	
	共生社会教育	12	
	数理基礎教育	11	
	自然環境教育	7	
	技術教育	1	
	家政教育	3	
	健康・スポーツ教育	19	
	音楽教育	16	
	美術教育	4	
合計		169	

図２から図４のグラフが示すように，平成16年度入学生と平成17年度入学生の教職志向は，各段階における比率に若干の差があるものの，その推移は，ほぼ同様の傾向を示している。例えば，図２で，「教師になりたい」と答えた者の比率は，３年次前期の学校教育実習Ⅲ終了時まで漸次減少傾向にあり，その後，３年次後期のいわゆる本実習（学校教育実習ⅣおよびⅤ）終了時には，２年次後期における比率程度にまで回復している。また，図２’から，そのような傾向は，初等系・中等系ともに共通しているものの，回復率としては初等系の方が５倍近く高いことが分かる（初等系17.7%，中等系3.7%）。

図３において，教員採用試験受験意欲は，学年進行に関わりなく，６割前後の割合で比較的平坦に推移しているように見える。しかしながら，図３’をみると，その傾向は初等系と中等系とで大きく異なり，初等系の学生は，本実習終了時に10%近く回復するのに対し，中等系の学生は，２年次から継続的に減り続けている。

また，図４から，教職に対する魅力は，学年進行とともに漸次増加傾向にあり，図４’から，その傾向は初等系・中等系に共通して見られる傾向であることが分かる。また，初等系の方が常に10%程度高いことも分かる。

総じて「教師になりたいか否か」，「教員採用試験を受験するかどうか」，「教師に魅力を感じるかどうか」という志向の変化は，必ずしも一致しないことが分かる。

表３．各設問に対し肯定的な回答を示した学生の割合（平成17年度入学生）[2)]

	1年次			2年次			3年次前期			3年次後期		
	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計
問1	77.5% (51)	70.1% (68)	73.2% (123)	63.6% (42)	57.3% (51)	60.0% (93)	51.4% (36)	43.0% (40)	46.6% (76)	69.1% (47)	46.7% (43)	56.3% (90)
問2	—	—	—	69.7% (46)	67.4% (60)	68.4% (106)	65.7% (46)	59.1% (55)	62.0% (101)	75.0% (51)	51.1% (47)	61.3% (98)
問3	—	—	—	71.2% (47)	61.8% (55)	65.8% (102)	78.6% (55)	65.6% (61)	71.2% (116)	82.4% (56)	71.7% (66)	76.3% (122)
回答数	100% (71)	100% (97)	100% (168)	100% (66)	100% (89)	100% (155)	100% (70)	100% (93)	100% (163)	100% (68)	100% (92)	100% (160)

図 2. 教職に対する志向の経年変化（2 学年比較）
「教師になりたい」と答えた者の比率の推移（%）

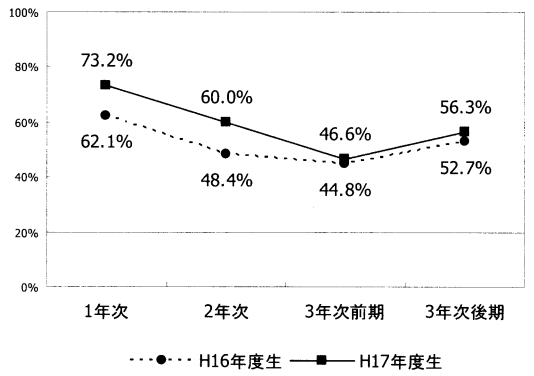


図 2′. 教職に対する志向の経年変化（専攻比較）
「教師になりたい」と答えた者の比率の推移（%）

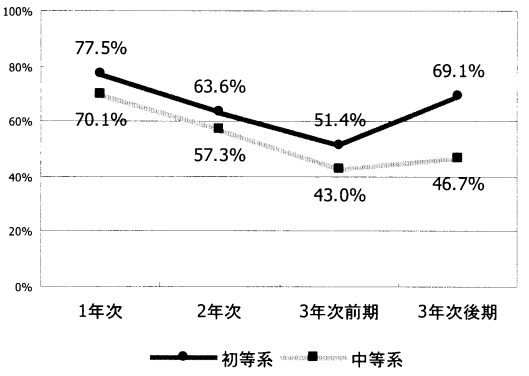


図 3. 教員採用試験受験意欲の経年変化（2 学年比較）
「教員採用試験を受験する」と答えた者の比率の推移（%）

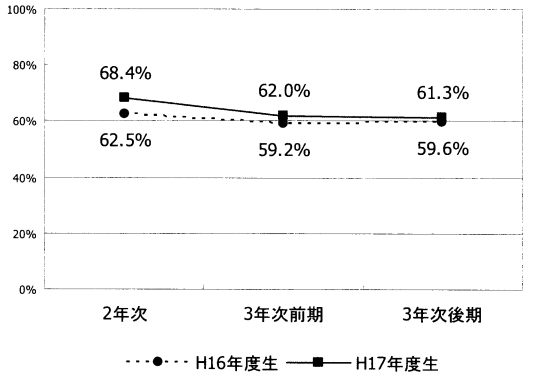


図 3′. 教員採用試験受験意欲の経年変化（専攻比較）
「教員採用試験を受験する」と答えた者の比率の推移（%）

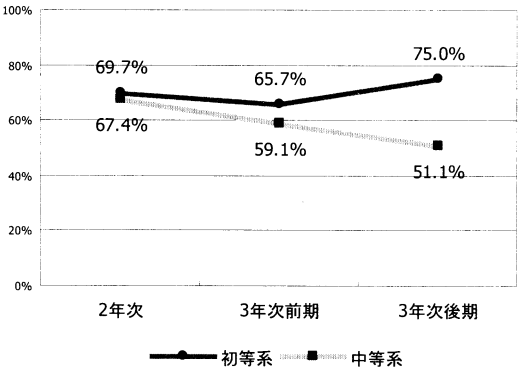


図 4. 教職に対する魅力の経年変化（2 学年比較）
「教職に魅力を感じる」と答えた者の比率の推移（%）

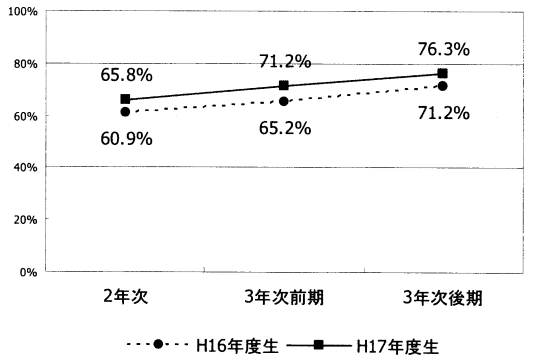
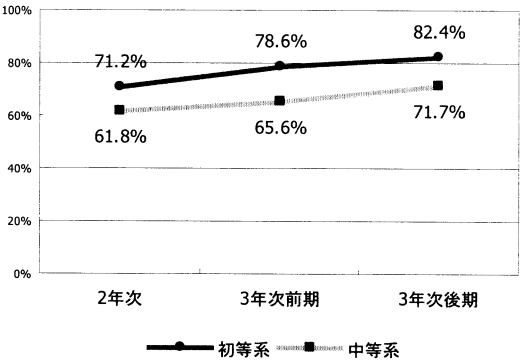


図 4′. 教職に対する魅力の経年変化（専攻比較）
「教職に魅力を感じる」と答えた者の比率の推移（%）



2．教職志向の変化の要因

このような，学生の教職志向の変化に影響を及ぼした要因について調べるために，平成17年度入学生に対しては，各設問に対し，そのように考えるようになったきっかけを併せて回答してもらうようにした。その結果は，次の表４から表６に示す通りである。

（1）全体的な傾向

表４が示すように，教師に「とてもなりたい」，「なりたい」と答えた学生のほぼ６割（57.1％；91人中52人）は，入学当初からそのように考えていたことが分かる。また，いわゆる教壇実習を経験して教師になりたいと考えるようになったと答えた学生の割合は，実習ⅣとⅤを合わせて27.5％（91人中25人）と，２番目に多くなっている。これは，学習支援やボランティア活動など，「基礎体験」の活動を理由に挙げる学生（12.1％；91人中11人）よりも２倍以上も多く，教職志向に対する教壇実習の及ぼす影響の強さが伺われる。

その一方で，教師に「あまりなりたくない」や「全くなりたくない」と答えた学生においても，その理由として学校教育実習Ⅳでの経験を挙げる学生が多く（23.8％；42人中10人），「入学当初から，そう思っているから」と回答した学生と同数であった。

以上のことから，学生の教職志向を左右する一つの大きな要因として，教壇実習での経験を指摘することができ，教壇実習をいかに充実したものにできるかどうかが，学生の教職への志向を高める一つの大きな要因と成り得ると言ってよいであろう。

また，表４から表６に共通して見られる傾向として，教職志向に対し肯定的な回答を示した学生の挙げる理由は，「入学当初から」，「本実習を経験して」，「基礎体験の活動から」という大きく３つの理由に大別できるのに対し，否定的な回答を示した学生の挙げる理由は多岐にわたっていることが挙げられる。このことは，将来の進路が未だ確定していない学生にとって，教職への志向が高まる機会よりも，教職への志向が下がる機会の方がより多く存在していると見ることができるかもしれない。

（2）初等系と中等系にみる傾向の違い

次に，初等系の学生と中等系の学生の傾向の違いに着目してみると，その違いは，教職志向に対し肯定的な回答を示した学生よりも，否定的な回答を示した学生において，顕著に表れているように思われる。表４において，教師に「あまりなりたくない」や「全くなりたくない」と回答した学生の中で，その理由に「大学での授業を通して，そう思うようになったから」（初等系9.1％（11人中１人），中等系16.1％（31人中５人））や「教員採用試験が難しそうだと思うから」（初等系0.0％（11人中０人），中等系6.5％（31人中２人）），「他に就きたい職業があるから」（初等系9.1％（11人中１人），中等系16.1％（31人中５人））といった理由を挙げる学生は，初等系よりも中等系の学生の方が多く見られた。同様の傾向が，表５においても見ることができる。これは，現在の教員養成を取り巻く実情を如実に反映したものとみることができ，前述の図２’や図３’において，中等系の学生の教職志向が初等系の学生に比べ，伸び悩んでいることの一つの理由とみてよいように思われる。

表 4. 教師になりたい，なりたくないと考えるようになったきっかけ（3 年次後期，有効数 159）

	とてもなりたい・なりたい			迷っている			あまりなりたくない・全くなりたくない		
	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計
入学当初から，そう思っているから	48.9% (22)	65.2% (30)	57.1% (52)	0.0% (0)	12.5% (2)	7.7% (2)	45.5% (5)	16.1% (5)	23.8% (10)
学校教育実習 IV を経験して，そう思うようになったから	24.4% (11)	21.7% (10)	23.1% (21)	30.0% (3)	25.0% (4)	26.9% (7)	18.2% (2)	25.8% (8)	23.8% (10)
学校教育実習 V を経験して，そう思うようになったから	6.7% (3)	2.2% (1)	4.4% (4)	20.0% (2)	0.0% (0)	7.7% (2)	0.0% (0)	6.5% (2)	4.8% (2)
その他の教育実習のプログラムを通して，そう思うようになったから	2.2% (1)	0.0% (0)	1.1% (1)	0.0% (0)	12.5% (2)	7.7% (2)	9.1% (1)	6.5% (2)	7.1% (3)
これまでの基礎体験の活動を通して，そう思うようになったから	15.6% (7)	8.7% (4)	12.1% (11)	10.0% (1)	6.3% (1)	7.7% (2)	9.1% (1)	3.2% (1)	4.8% (2)
大学での授業を通して，そう思うようになったから	0.0% (0)	2.2% (1)	1.1% (1)	20.0% (2)	6.3% (1)	11.5% (3)	9.1% (1)	16.1% (5)	14.3% (6)
教員採用試験が難しそうだと思うから	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	6.3% (1)	3.8% (1)	0.0% (0)	6.5% (2)	4.8% (2)
他に就きたい職業があるから	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	6.3% (1)	3.8% (1)	9.1% (1)	16.1% (5)	14.3% (6)
その他の理由	2.2% (1)	0.0% (0)	1.1% (1)	20.0% (2)	25.0% (4)	23.1% (6)	0.0% (0)	3.2% (1)	2.4% (1)
計	100% (45)	100% (46)	100% (91)	100% (10)	100% (16)	100% (26)	100% (11)	100% (31)	100% (42)

表 5. 教員採用試験を受験する，しないと考えるようになったきっかけ（3 年次後期，有効数 161）

	必ず受験する・おそらく受験する			迷っている			あまり受験するつもりはない・全く受験するつもりはない		
	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計
入学当初から，そう思っているから	52.0% (26)	66.0% (33)	59.0% (59)	20.0% (1)	7.1% (1)	10.5% (2)	33.3% (4)	13.3% (4)	19.0% (8)
学校教育実習 IV を経験して，そう思うようになったから	20.0% (10)	20.0% (10)	20.0% (20)	20.0% (1)	50.0% (7)	42.1% (8)	16.7% (2)	16.7% (5)	16.7% (7)
学校教育実習 V を経験して，そう思うようになったから	8.0% (4)	0.0% (0)	4.0% (4)	20.0% (1)	7.1% (1)	10.5% (2)	0.0% (0)	6.7% (2)	4.8% (2)
その他の教育実習のプログラムを通して，そう思うようになったから	2.0% (1)	0.0% (0)	1.0% (1)	0.0% (0)	14.3% (2)	10.5% (2)	8.3% (1)	6.7% (2)	7.1% (3)
これまでの基礎体験の活動を通して，そう思うようになったから	14.0% (7)	6.0% (3)	10.0% (10)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	8.3% (1)	3.3% (1)	4.8% (2)
大学での授業を通して，そう思うようになったから	0.0% (0)	4.0% (2)	2.0% (2)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	16.7% (2)	20.0% (6)	19.0% (8)
教員採用試験の状況が良くなりそうだと思うから	0.0% (0)	2.0% (1)	1.0% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
教員採用試験が難しそうだと思うから	0.0% (0)	2.0% (1)	1.0% (1)	0.0% (0)	7.1% (1)	5.3% (1)	8.3% (1)	13.3% (4)	11.9% (5)
他に就きたい職業があるから	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	20.0% (1)	0.0% (0)	5.3% (1)	8.3% (1)	16.7% (5)	14.3% (6)
その他の理由	4.0% (2)	0.0% (0)	2.0% (2)	20.0% (1)	14.3% (2)	15.8% (3)	0.0% (0)	3.3% (1)	2.4% (1)
計	100% (50)	100% (50)	100% (100)	100% (5)	100% (14)	100% (19)	100% (12)	100% (30)	100% (42)

表 6. 教職に魅力を感じる，感じないと考えるようになったきっかけ（3 年次後期，有効数 161）

	とても魅力を感じる・魅力を感じる			どちらとも言えない			あまり魅力を感じない・全く魅力を感じない		
	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計	初等系	中等系	計
入学当初から，そう思っているから	27.8% (15)	45.6% (31)	37.7% (46)	37.5% (3)	35.3% (6)	36.0% (9)	40.0% (2)	20.0% (2)	28.6% (4)
学校教育実習 IV を経験して，そう思うようになったから	42.6% (23)	36.8% (25)	39.3% (48)	12.5% (1)	41.2% (7)	32.0% (8)	40.0% (2)	30.0% (3)	35.7% (5)
学校教育実習 V を経験して，そう思うようになったから	9.3% (5)	7.4% (5)	8.2% (10)	12.5% (1)	0.0% (0)	4.0% (1)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)
その他の教育実習のプログラムを通して，そう思うようになったから	1.9% (1)	1.5% (1)	1.6% (2)	0.0% (0)	5.9% (1)	4.0% (1)	0.0% (0)	10.0% (1)	7.1% (1)
これまでの基礎体験の活動を通して，そう思うようになったから	16.7% (9)	7.4% (5)	11.5% (14)	12.5% (1)	0.0% (0)	4.0% (1)	20.0% (1)	10.0% (1)	14.3% (2)
大学での授業を通して，そう思うようになったから	0.0% (0)	1.5% (1)	0.8% (1)	12.5% (1)	5.9% (1)	8.0% (2)	0.0% (0)	10.0% (1)	7.1% (1)
その他の理由	1.9% (1)	0.0% (0)	0.8% (1)	12.5% (1)	11.8% (2)	12.0% (3)	0.0% (0)	10.0% (1)	7.1% (1)
計	100% (54)	100% (68)	100% (122)	100% (8)	100% (17)	100% (25)	100% (5)	100% (10)	100% (14)

Ⅳ．学校教育実習の教育効果

次に，教育実習の最終プログラムである，４年次前期の学校教育実習Ⅵ終了時に実施したアンケート調査の結果から，「学校教育実習Ⅵの成果と課題」や，「４年間にわたる教育実習の教育効果」について検討してみたい。

１．学校教育実習Ⅵの概要

学校教育実習Ⅵは，「副免型」，「深化型」，「セミナー型（演習科目）」の３つのタイプから１つを選択する，選択型の実習であり，それぞれに実習校や時間・単位認定の方法が異なる。

「副免型」は，異校種での副免許取得を希望する学生に用意された１週間の教壇・保育実習であり，各自の副専攻に応じて，附属幼稚園・小学校・中学校の中から実習校を選択する。

「深化型」は，同校種での副免許取得を希望する学生や，副免を取得せずに主専攻を深めたいと考えている学生に対し，用意された教育実習である（つまり，主免実習と同校種で行う実習パターンが深化型である）。初等系の学生は附属小学校に，中等系の学生は附属中学校に行き，副免型の学生とともに，１週間の教壇実習を行う。

「セミナー型」は，副免取得を希望しない学生が大学での演習科目を受講し，時間認定（40時間）のみを行う実習パターンである。

表７．平成20年度　学校教育実習Ⅵ　履修者

		副免型			深化型		演習科目	合計	
		小	中	幼	小	中			
初等系	初等教育開発	—	22	20	3	—	2	47	71
	心理・臨床	—	4	4	2	—	2	12	
	特別支援教育	—	2	7	3	—	0	12	
中等系	国語教育	6	—	0	—	9	1	16	95
	英語教育	4	—	0	—	2	1	7	
	共生社会教育	3	—	0	—	7	2	12	
	数理基礎教育	4	—	1	—	6	0	11	
	自然環境教育	2	—	0	—	4	1	7	
	技術教育	0	—	0	—	0	1	1	
	家政教育	2	—	1	—	0	0	3	
	健康・スポーツ	12	—	6	—	2	0	20	
	音楽教育	7	—	1	—	6	0	14	
	美術教育	4	—	0	—	0	0	4	
合計		44	28	40	8	36	10	166	

なお，平成20年度学校教育実習Ⅵの履修者数は，表７に示す通りである。

２．選択型・実習校別にみた学生の教職志向

では，このような学校教育実習Ⅵの選択型や実習校によって，学生の教職志向にどのような違いが見られるのであろうか。言い換えれば，どのような志向の学生が，どのような実習パターンを選択したのであろうか。

このことを調べるために，平成17年度入学生に関し，彼らが学校教育実習Ⅳ・Ⅴを終えた段階での教職志向と，実習Ⅵにおける実習パターンとのクロス集計を行った結果は，右頁の表８から表10に示す通りである。

表　. 実習 VI 履修前の「教職に対する志向」（実習 VI 選択・校種別）

	副免型				深化型			演習科目
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計	
とてもなりたい	39.5% (17)	40.7% (11)	33.3% (13)	37.6% (41)	28.6% (2)	22.2% (8)	23.3% (10)	12.5% (1)
なりたい	18.6% (8)	40.7% (11)	25.6% (10)	26.6% (29)	14.3% (1)	22.2% (8)	20.9% (9)	0.0% (0)
迷っている	18.6% (8)	11.1% (3)	20.5% (8)	17.4% (19)	0.0% (0)	19.4% (7)	16.3% (7)	0.0% (0)
あまりなりたくない	16.3% (7)	3.7% (1)	15.4% (6)	12.8% (14)	14.3% (1)	13.9% (5)	14.0% (6)	25.0% (2)
まったくなりたくない	7.0% (3)	3.7% (1)	5.1% (2)	5.5% (6)	42.9% (3)	22.2% (8)	25.6% (11)	62.5% (5)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (36)	100% (43)	100% (8)

表 9. 実習 VI 履修前の「教員採用試験受験意欲」（実習 VI 選択・校種別）

	副免型				深化型			演習科目
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計	
必ず受験する	44.2% (19)	63.0% (17)	46.2% (18)	49.5% (54)	42.9% (3)	37.8% (14)	37.2% (16)	12.5% (1)
おそらく受験する	20.9% (9)	25.9% (7)	20.5% (8)	22.0% (24)	0.0% (0)	8.1% (3)	7.0% (3)	0.0% (0)
迷っている	14.0% (6)	3.7% (1)	12.8% (5)	11.2% (12)	0.0% (0)	18.9% (7)	16.3% (7)	0.0% (0)
あまり受験するつもりはない	11.6% (5)	3.7% (1)	12.8% (5)	10.1% (11)	14.3% (1)	10.8% (4)	11.6% (5)	25.0% (2)
まったく受験するつもりはない	9.3% (4)	3.7% (1)	7.7% (3)	7.3% (8)	42.9% (3)	24.3% (9)	27.9% (12)	62.5% (5)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (37)	100% (43)	100% (8)

表 10. 実習 VI 履修前の「教職に対する魅力」（実習 VI 選択・校種別）

	副免型				深化型			演習科目
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計	
とても魅力を感じる	37.2% (16)	25.9% (7)	38.5% (15)	34.9% (38)	42.9% (3)	29.7% (11)	32.6% (14)	12.5% (1)
魅力を感じる	46.5% (20)	63.0% (17)	43.6% (17)	49.5% (54)	14.3% (1)	37.8% (14)	34.9% (15)	0.0% (0)
どちらともいえない	14.0% (6)	7.4% (2)	7.7% (3)	10.1% (11)	28.6% (2)	21.6% (8)	20.9% (9)	37.5% (3)
あまり魅力を感じない	2.3% (1)	3.7% (1)	10.3% (4)	5.5% (6)	14.3% (1)	8.1% (3)	9.3% (4)	25.0% (2)
まったく魅力を感じない	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	2.7% (1)	2.3% (1)	25.0% (2)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (37)	100% (43)	100% (8)

表８や表９から，「副免型」を選択した学生は，各校種ともに，教職志向に対する肯定的な回答を示していた学生が多く，教職志向のあまり高くない学生は各校種とも２割前後と比較的少ないことが分かる。また，予想されたことではあるが，「演習科目」を選択した学生の多くは，教職志向の高くない学生であった。

それら２つの選択型とは対照的に，「深化型」を選択した学生においては，各校種ともに，志向の高い学生とあまり高くない学生とが混在し，ほぼ二極化されていたことが分かる。これは，教職志向のあまり高くない学生の受け皿として，「演習科目」が十分に受け切れていないことを示しており，選択した学生の，定期的にセミナーに参加するより，１週間の実習を乗り切った方がよいという考えが伺える。

では，学校教育実習VIを終え，実際に彼らの教職志向はどのように変わったのだろうか。そ

の結果は，次頁の表８’’から表10’’に示す通りである。

表８’’や表９’’において，「副免型」の学生では，実習Ⅵ終了時に，各校種とも，教職志向に対する肯定的な回答を示す学生が増えてきていることが分かる。特に，小学校を実習校とする学生でその傾向が強く，中学校や幼稚園では，もともと志向の高い学生がより高い志向へと移行する傾向があるように思われる。

それとは対照的に，「深化型」の学生では，表８’’において，「副免型」と同様，もともと志向の高い学生がより志向を深める傾向が若干見受けられるものの，実習前に「迷っている」と回答した学生が，実習を終え，より低い志向へと移行する傾向もあるように思われる。

表10’’においても同様に，「副免型」の学生は，教職に対する魅力を感じる学生が増える傾向にあり，逆に「深化型」の学生は，教職に対する魅力を低下させる傾向が見て取れる。

３．学校教育実習Ⅵや教育実習の成果と課題

最後に，そのような教職志向の変化に影響を及ぼした要因も含め，教育実習の最終プログラムとしての学校教育実習Ⅵや４年間にわたる一連の学校教育実習プログラムの教育効果について検証してみたい。

具体的な方法としては，学校教育実習Ⅵ終了時のアンケート調査において，過去のアンケート調査との同一項目を設定し，それらの比較を通して検証することにした。しかしながら，各実習後に実施しているアンケートの質問項目は，もともと，各プログラムがねらいとすることを中心に構成されているものであり，４年間にわたる教育実習の教育効果の検証を目的として設計されたものではない。それゆえ，実際に同一項目として設定できるものには限りがあり，具体的には以下の５点，合計63項目に絞ることにした。

１）教育実習における全般的な取り組み（30項目）　｝　１）実習Ⅲと実習Ⅳ，実習Ⅵ終了時における自己評価の比較

２）授業の展開過程に関する観察力（７項目）
３）教師の発問・指示・表情等に関する観察力（８項目）
４）授業中の子どもの動きや表情に関する観察力（12項目）
５）授業協議会に関する取り組み（６項目）
｝　２）から５）実習Ⅱと実習Ⅵ終了時における自己評価の比較

なお，分析対象としては，学校教育実習Ⅵの「副免型」または「深化型」を選択し，かつ，実習校が小学校と中学校であるものとすることにした。過去の実習における自己評価との比較という観点から，実習Ⅵにおいて「演習科目」や「幼稚園実習」を履修した学生に対しては，適切な分析をすることができないと考えるからである。

表 8′. 実習 VI 履修前の「教職に対する志向」（実習 VI 選択・校種別，ただし深化型は除く）

	副免型				深化型		
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
とてもなりたい	39.5% (17)	40.7% (11)	33.3% (13)	37.6% (41)	28.6% (2)	22.2% (8)	23.3% (10)
なりたい	18.6% (8)	40.7% (11)	25.6% (10)	26.6% (29)	14.3% (1)	22.2% (8)	20.9% (9)
迷っている	18.6% (8)	11.1% (3)	20.5% (8)	17.4% (19)	0.0% (0)	19.4% (7)	16.3% (7)
あまりなりたくない	16.3% (7)	3.7% (1)	15.4% (6)	12.8% (14)	14.3% (1)	13.9% (5)	14.0% (6)
まったくなりたくない	7.0% (3)	3.7% (1)	5.1% (2)	5.5% (6)	42.9% (3)	22.2% (8)	25.6% (11)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (36)	100% (43)

→

表 8″. 実習 VI 履修後の「教職に対する志向」

副免型				深化型		
小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
52.8% (19)	55.6% (15)	43.2% (16)	50.0% (50)	33.3% (2)	28.6% (10)	29.3% (12)
16.7% (6)	22.2% (6)	27.0% (10)	22.0% (22)	16.7% (1)	17.1% (6)	17.1% (7)
22.2% (8)	14.8% (4)	8.1% (3)	15.0% (15)	0.0% (0)	8.6% (3)	7.3% (3)
8.3% (3)	3.7% (1)	10.8% (4)	8.0% (8)	0.0% (0)	31.4% (11)	26.8% (11)
0.0% (0)	3.7% (1)	10.8% (4)	5.0% (5)	50.0% (3)	14.3% (5)	19.5% (8)
100% (36)	100% (27)	100% (37)	100% (100)	100% (6)	100% (35)	100% (41)

表 9′. 実習 VI 履修前の「教員採用試験受験意欲」（実習 VI 選択・校種別，ただし深化型は除く）

	副免型				深化型		
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
必ず受験する	44.2% (19)	63.0% (17)	46.2% (18)	49.5% (54)	42.9% (3)	36.1% (13)	37.2% (16)
おそらく受験する	20.9% (9)	25.9% (7)	20.5% (8)	22.0% (24)	0.0% (0)	8.3% (3)	7.0% (3)
迷っている	14.0% (6)	3.7% (1)	12.8% (5)	11.0% (12)	0.0% (0)	19.4% (7)	16.3% (7)
あまり受験するつもりはない	11.6% (5)	3.7% (1)	12.8% (5)	10.1% (11)	14.3% (1)	11.1% (4)	11.6% (5)
まったく受験するつもりはない	9.3% (4)	3.7% (1)	7.7% (3)	7.3% (8)	42.9% (3)	25.0% (9)	27.9% (12)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (36)	100% (43)

→

表 9″. 実習 VI 履修後の「教員採用試験受験意欲」

副免型				深化型		
小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
66.7% (24)	74.1% (20)	70.3% (26)	70.0% (70)	50.0% (3)	31.4% (11)	34.1% (14)
5.6% (2)	18.5% (5)	2.7% (1)	8.0% (8)	16.7% (1)	14.3% (5)	14.6% (6)
13.9% (5)	0.0% (0)	0.0% (0)	5.0% (5)	0.0% (0)	5.7% (2)	4.9% (2)
5.6% (2)	3.7% (1)	10.8% (4)	7.0% (7)	16.7% (1)	17.1% (6)	17.1% (7)
8.3% (3)	3.7% (1)	16.2% (6)	10.0% (10)	16.7% (1)	31.4% (11)	29.3% (12)
100% (36)	100% (27)	100% (37)	100% (100)	100% (6)	100% (35)	100% (41)

表 10′. 実習 VI 履修前の「教職に対する魅力」（実習 VI 選択・校種別，ただし深化型は除く）

	副免型				深化型		
	小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
とても魅力を感じる	37.2% (16)	25.9% (7)	38.5% (15)	34.9% (38)	42.9% (3)	30.6% (11)	32.6% (14)
魅力を感じる	46.5% (20)	63.0% (17)	43.6% (17)	49.5% (54)	14.3% (1)	38.9% (14)	34.9% (15)
どちらともいえない	14.0% (6)	7.4% (2)	7.7% (3)	10.1% (11)	28.6% (2)	19.4% (7)	20.9% (9)
あまり魅力を感じない	2.3% (1)	3.7% (1)	10.3% (4)	5.5% (6)	14.3% (1)	8.3% (3)	9.3% (4)
まったく魅力を感じない	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	2.8% (1)	2.3% (1)
合計	100% (43)	100% (27)	100% (39)	100% (109)	100% (7)	100% (36)	100% (43)

→

表 10″. 実習 VI 履修後の「教職に対する魅力」

副免型				深化型		
小学校	中学校	幼稚園	計	小学校	中学校	計
52.8% (19)	44.4% (12)	61.1% (22)	53.5% (53)	50.0% (3)	37.1% (13)	39.0% (16)
33.3% (12)	40.7% (11)	27.8% (10)	33.3% (33)	0.0% (0)	31.4% (11)	26.8% (11)
11.1% (4)	11.1% (3)	5.6% (2)	9.1% (9)	16.7% (1)	11.4% (4)	12.2% (5)
2.8% (1)	3.7% (1)	2.8% (1)	3.0% (3)	33.3% (2)	11.4% (4)	14.6% (6)
0.0% (0)	0.0% (0)	2.8% (1)	1.0% (1)	0.0% (0)	8.6% (3)	7.3% (3)
100% (36)	100% (27)	100% (36)	100% (99)	100% (6)	100% (35)	100% (41)

（1）教育実習における全般的な取り組みに対する学生の自己評価

それではまず，教育実習における全般的な取り組みについて見てみよう。なお，以下の表11から表15において，表中の数値は，各質問項目に対する学生の５段階での自己評価（「５．非常に良くあてはまる」，「４．良くあてはまる」，「３．どちらとも言えない」，「２．あまりあてはまらない」，「１．全くあてはまらない」）の平均値を表している。

全体的な傾向として，実習Ⅲと実習Ⅳにおける自己評価の平均を比較すると，23)と25）の２つの項目以外は全て，実習Ⅳにおける自己評価の方が高くなっている。また，２）自分なりの視点で授業観察記録をとることや，５）同じ配当学級や学年，教科の実習生と協力すること，12）実習に合わせて生活のリズムを整えること，29）目的意識を持って取り組むことなどの項目は，我々が１年次からの教育実習プログラムで特に強調してきた観点であり，総じて高い達成度を示している。

また，実習Ⅵとの比較で見ると，１）配当学級の児童・生徒の名前を覚えることや，２）自分なりの視点で授業観察記録をとること，10）個々の子どもの個性や特徴を理解すること，11）附属学校の教育活動に貢献することなど，実習期間の短さに起因すると思われる項目で，やや評価が低くなる傾向があるものの，全般的には自己評価が高くなっている。

特に，３）「教師の視線」で授業や子どもを観ることや，16）子どもと関わることに自信が持てるようになった，18）子どもに対して「教師の立場」を保つことができた，19）かたより無く子どもと関わることができた，20）場面に応じて適切な言葉がけができた，など，子どもとの関わりに関する項目で，軒並み自己評価が高くなっていることに注目したい。そのことに関し，実習Ⅵにおける実習校別の比較で見ると，例えば，６）自分から進んで子どもたちと関わることができた，９）必要なときに児童・生徒を叱ることができた，10）個々の子どもの個性や特徴を理解することができた，16）子どもと関わることに自信が持てるようになった，19）かたより無く子どもと関わることができた，などの項目で，小学校を実習校とする学生の方が0.5から１ポイント程度，自己評価の平均が高くなっており，先に見た，小学校を実習校とする学生の教職志向の高まりは，このような子どもとの関わりにあるとみることができるかもしれない。また，小学校を実習校とする学生の大半（84.6%；52人中44人）は中等系の学生であり，異校種実習の意義は，特に中等系の学生にとって大きいように思われる。

（2）授業観察の取り組みに対する学生の自己評価

次に，授業観察に関する取り組みについて見てみたい。全体的な傾向として，次の表12から表14における，実習Ⅱと実習Ⅵの自己評価の平均を比較してみると，総じて実習Ⅵにおける自己評価の方が高くなっていることが分かる。特に，表12において，１）観察した授業の「本時の目標」を押さえることや，５）「導入」「展開」「まとめ」といった流れを的確に押さえること，６）授業の「ヤマ場」を押さえることなどの，授業観察に係る基本的な事項についての達成度が高くなっている。

しかしながら，授業を広い視野でみるために必要な，３）本時の内容を全体の単元と関わらせながら観察することや，４）既習事項を確認し，授業観察に挑むこと，７）次時の学習とのつながりを予測すること，といった項目に対する自己評価は低く，課題である。また，このこ

表11. 教育実習における全般的な取り組み（実習Ⅲ，Ⅳ，Ⅵの経年比較と実習Ⅵ実習校別・選択型別の比較）

	経年比較(n=98)					実習校別			選択型別		
	実習 III	実習 IV		実習 VI		小学校 (n=44)	中学校 (n=64)		副免型 (n=65)	深化型 (n=43)	
1) 配当学級の児童・生徒の顔と名前を覚えることができた	4.46	4.74	**	3.69	**	4.79	3.02	**	3.88	3.51	
2) 自分なりの視点で授業観察記録をとることができた	4.00	4.20	**	3.97	**	3.98	3.97		3.89	4.09	
3) 「教師の視線」で授業や子どもを観ることができた	3.76	3.84		4.00	*	4.05	3.91		4.00	3.91	
4) 教師の仕事や学校の動きを把握することができた	3.58	4.00	**	3.86		4.14	3.67	**	3.81	3.93	
5) 同じ配当学級や学年，教科の実習生と協力しあえた	4.37	4.48		4.39		4.28	4.50		4.41	4.42	
6) 自分から進んで子どもたちと関わることができた	3.63	4.12	**	4.04		4.65	3.66	**	4.23	3.79	*
7) 実習校の指導教員に積極的に関わることができた	3.68	3.77		4.04	*	4.21	3.91		3.98	4.09	
8) 教生朝礼・終礼ではメモを採る習慣が身に付いた	2.67	3.17	**	3.41		3.07	3.64	*	3.25	3.65	
9) 必要なときに児童・生徒を叱ることができた	2.47	3.09	**	3.21		3.81	2.84	**	3.36	3.05	
10) 個々の子どもの個性や特徴を理解することができた	3.90	3.92		3.73	*	4.09	3.44	**	3.78	3.58	
11) 附属学校の教育活動に貢献するように努めた	3.16	3.69	**	3.55	*	3.74	3.44		3.56	3.56	
12) 実習に合わせて生活のリズムを整えることができた	4.03	4.37	**	4.16	*	4.05	4.11		4.00	4.21	
13) その日の予定を事前に確認する習慣が身に付いた	3.83	4.02	*	4.10		4.00	4.16		4.00	4.23	
14) 校舎内の教室配置などを頭に入れることができた	3.55	4.14	**	4.10		4.09	4.02		3.75	4.49	**
15) 学部の授業や体験活動での学習を活かせた	3.46	3.58		4.02	**	4.00	3.98		4.02	3.95	
16) 子どもと関わることに自信が持てるようになった	3.05	3.70	**	3.96	**	4.23	3.75	**	3.97	3.91	
17) 教職に対する気持ちが前向きになった	3.36	3.70	**	3.87		3.98	3.77		4.02	3.60	*
18) 子どもに対して「教師の立場」を保つことができた	2.85	3.12	**	3.64	**	3.70	3.50		3.63	3.51	
19) かたより無く子どもと関わることができた	2.59	2.97	**	3.26	**	3.72	2.94	**	3.41	3.02	
20) 場面に応じて適切な言葉かけができた	2.98	3.41	**	3.62	*	3.70	3.48		3.55	3.60	
21) 配当学級の雰囲気を自分なりにつかむことができた	4.03	4.29	**	4.37		4.49	4.23	*	4.41	4.23	
22) 教科の専門性を核として子どもに向き合うことができた	3.21	3.53	**	3.36		3.16	3.45		3.22	3.51	
23) 指導教員の授業を自分なりに解釈することができた	4.06	3.90	*	4.09	*	4.07	4.03		4.00	4.12	
24) 授業以外の教師の仕事で代わりを務められた	2.98	3.16	*	3.39	*	3.60	3.25	*	3.45	3.30	
25) 今後の自己の課題が明確になった	4.46	4.30	*	4.48	*	4.65	4.36	*	4.66	4.21	**
26) 教生控室の美化に努め、率先して動くことができた	3.31	3.50	*	3.58		3.53	3.64		3.48	3.77	
27) 教育の現場に関心が持てるようになった	3.85	3.95		4.07		4.21	3.98		4.33	3.70	**
28) コミュニケーション力や自己表現力が向上した	3.54	3.96	**	4.02		4.05	3.97		4.08	3.88	
29) 目的意識を持ち、意欲的に取り組むことができた	4.05	4.11		4.18		4.14	4.22		4.23	4.12	
30) この実習を通してより良く変わることができた	3.86	4.25	**	4.20		4.28	4.19		4.30	4.12	

注 1. 表中の数値は，各質問項目に対する回答の平均値を表す。
注 2. 表中の*は 5%水準，**は 1%水準で有意な差があることを示す（以下の表も同様）。

表 12. 授業の展開過程に関する観察力（実習 II, VI の経年比較と実習 VI 実習校別・選択型別比較）

	経年比較(n=98)			実習校別			選択型別		
	実習 II	実習 VI		小学校 (n=44)	中学校 (n=64)		副免型 (n=65)	深化型 (n=43)	
1) 観察した授業の「本時の目標」を押さえること	3.68	4.11	**	4.25	4.03		4.12	4.12	
2) 授業観察に必要な用語を駆使して記録をとること	3.02	3.18		3.32	3.13		3.22	3.19	
3) 本時の内容を，全体の単元と関わらせながら観察すること	3.23	3.46	*	3.52	3.36		3.40	3.47	
4) 既習事項を確認し，授業観察に臨むこと	3.13	3.31		3.18	3.33		3.05	3.60	**
5) 「導入」「展開」「まとめ」といった流れを的確に押さえること	4.07	4.11		3.93	4.23		4.02	4.26	
6) 授業の「ヤマ場」を押さえること	3.79	4.17	**	4.00	4.27		4.05	4.33	*
7) 次時の学習とのつながりを予測すること	3.36	3.73	**	3.80	3.67		3.66	3.81	

表 13. 教師の発問・指示・表情等に関する観察力（実習 II, VI の経年比較と実習 VI 実習校別・選択型別比較）

	経年比較(n=98)			実習校別			選択型別		
	実習 II	実習 VI		小学校 (n=44)	中学校 (n=64)		副免型 (n=65)	深化型 (n=43)	
1) 教師の発問や指示等，その仕方や順序に注目すること	4.19	4.44	**	4.43	4.44		4.32	4.60	*
2) 子どもの発言を踏まえた教師の発問や指示等に注目すること	4.28	4.40		4.55	4.30	*	4.43	4.35	
3) 子どもが使うノートやワークシートに注目すること	3.72	3.68		3.57	3.70		3.69	3.58	
4) 教師の作成した教材・教具・補助資料の意味を推測しながら観察すること	3.67	3.70		3.89	3.61		3.71	3.74	
5) 教師の教授行為の中に，子どもの個人差への配慮や働きかけを見出すこと	3.68	3.98	*	4.27	3.78	**	4.00	3.95	
6) OHP, VTR などの視聴覚教育機器や補助教材の活用方法に注目すること	3.17	3.26		2.89	3.55	**	3.14	3.49	
7) 板書の構造や使い方に注目すること	4.05	4.01		4.02	4.09		4.05	4.09	
8) 学習形態（一斉指導，グループ学習，個別学習）の編成に注目すること	3.90	3.71		3.73	3.69		3.71	3.70	

表 14. 授業中の子どもの動きや表情に関する観察力（実習 II, VI の経年比較と実習 VI 実習校別・選択型別比較）

	経年比較(n=98)			実習校別			選択型別		
	実習 II	実習 VI		小学校 (n=44)	中学校 (n=64)		副免型 (n=65)	深化型 (n=43)	
1) 子どもの発達段階や学年による違いを考慮すること	3.54	3.94	**	3.91	3.92		3.85	4.02	
2) 子どもの既有の知識や経験，興味・関心を推測すること	3.32	3.84	**	3.95	3.75		3.88	3.77	
3) 特定の子どもに注目し，その学習進度や学習の阻害要因を推測すること	2.74	3.08	**	3.66	2.69	**	3.11	3.05	
4) 挙手する/しないの動きから，子どもの学習への意欲を推測すること	3.23	3.67	**	3.75	3.56		3.60	3.70	
5) 挙手する/しないの動きから，教師の発問や指示の難易度・的確さを捉えること	3.17	3.76	**	3.68	3.83		3.63	3.98	
6) 子どもの表情から，学習への意欲を推測すること	3.49	3.94	**	3.93	3.91		3.92	3.91	
7) 個々の子どもの発言を予測しながら観察すること	3.06	3.21		3.25	3.14		3.18	3.19	
8) 子どもの発言の妥当性を的確に判断すること	3.12	3.38	*	3.50	3.27		3.43	3.26	
9) 子どもの発言の意図や真意を捉えようとすること	3.50	3.90	**	4.14	3.77	*	3.92	3.91	
10) 発言の少ない子どもの表情や動きに注目すること	2.89	3.47	**	3.91	3.20	**	3.58	3.35	
11) 適切な場所で観察すること	3.78	3.83		3.86	3.67		3.78	3.70	
12) グループ学習等の場面で，学習者の傍らに移動して観察すること	3.46	4.04	**	4.11	4.06		4.15	3.98	

とに関し，「副免型」の学生の方が相対的に自己評価が低くなる傾向が見て取れることから，副免許取得に関わる事前・事後指導などの指導体制も充実させることも考えなければならないだろう。

また，表14を見てみると，前述した，教育実習における全般的な取り組みでの傾向と，ほぼ同様の傾向が見て取れる。つまり，子ども理解に関する項目で，軒並み自己評価が高くなり，特に，小学校を実習校とする学生において，その傾向が伺える。

（3）授業協議会の取り組みに対する学生の自己評価

最後に，授業協議に係る取り組みについて見てみよう。次の表15において，実習Ⅱと実習Ⅵにおける自己評価の平均を比較してみると，これまでの傾向とは大きく異なり，自己評価が下がる項目と上がる項目とが明確に分かれていることが分かる。

例えば，5）授業協議において，自分なりの考えや解釈を示すことや，9）授業協議を通して，専攻する教科や校種への理解を深めること，10)「学習者としての子ども」への理解を深めることに対する自己評価は，0.5から0.7ポイント程度上がっており，授業協議の意義を理解し，授業について，協議を通して深める力が，学生の中に育まれていることが伺える。

他方で，1）事前に自分なりの観点を定め，文章に整理すること，2）疑問に思ったこと，質問したいことを文章に整理すること，3）疑問に思ったことについて，事前に教科書や指導書などを調べ，自分なりの考えを持っておくことなどの項目は，相対的に自己評価が低くなっている。このことは，学生が，事前に文章に整理するなどの準備をすることなしに，自分たちで充実した授業協議を進めることができるようになったと見るのであれば，一つの成長と見ることもできるかもしれないが，これらの項目は，我々が1年次からの教育実習プログラムの中で再三強調してきたことでもあり，今後，実習のワークシートを工夫するなど，改善の余地があるかもしれない。

表15. 授業協議会に関する取り組み（実習Ⅱ，Ⅵの経年比較と実習Ⅵ実習校別・選択型別比較）

	経年比較(n=98)			実習校別			選択型別		
	実習 II	実習 VI		小学校 (n=44)	中学校 (n=64)		副免型 (n=65)	深化型 (n=43)	
1) 事前に自分なりの観点を定め，文章に整理すること	3.46	3.30		3.20	3.43		3.43	3.19	
2) 疑問に思ったこと，質問したいことを文章に整理すること	3.56	3.04	**	3.14	3.11		3.20	3.00	
3) 疑問に思ったことについて，事前に教科書や指導書などを調べ，自分なりの考えを持っておくこと	—	2.96		2.84	3.03		2.98	2.91	
4) 授業協議において，同級生や指導教員の発言を踏まえたうえで，自分の意見を述べること	—	3.80		3.72	3.88		3.78	3.86	
5) 授業協議において，単に質問するだけではなく，自分なりの考えや解釈を示すこと	3.47	3.91	**	4.02	3.80		3.88	3.91	
6) 授業協議において，授業観察に必要な用語を用いて発言をすること	—	2.98		2.93	2.95		2.97	2.91	
7) 授業協議において，意見交換を活発にし，充実した協議にすること	—	3.73		3.86	3.66		3.91	3.49	*
8) 授業協議で得た知見を自分なりに整理し，レポートにまとめること	3.44	3.61		3.45	3.63		3.52	3.60	
9) 授業協議を通して，専攻する教科や校種への理解を深めること	3.69	4.22	**	4.21	4.23		4.28	4.14	
10) 授業協議を通して，「学習者としての子ども」への理解を深めること	3.56	4.23	**	4.23	4.19		4.25	4.14	

注．表中の「－」は，その時期のデータがないことを表す。

V．おわりに

本稿では，平成17年度入学生に対する意識調査の結果から，１年次から４年次までの４年間にわたる学校教育実習プログラムの評価と検証を行ってきた。

教職志向の経年変化の分析から，学生の教職志向を左右する一つの要因に，教壇実習の及ぼす影響が挙げられ，特に，子どもとの関わりが大きな影響を及ぼしている可能性があることを指摘した。また，「教職になりたいか否か」，「教員採用試験を受験するかどうか」，「教職に魅力を感じるかどうか」という教職に対する志向は，それぞれ異なる傾向を示し，学年を経るごとに，教職に対する魅力は漸次増加傾向にあるものの，それが必ずしも他の志向へ結びつくわけではないことが分かった。

また，学校教育実習Ⅵのアンケート結果の分析からは，異校種で実習を行った「副免型」の学生は，実習後，全体的に教職志向を高める学生が多いものの，同校種で実習を行った「深化型」では，それまで中間的な志向を示していた学生が志向を下げる傾向にあることを指摘した。さらには，過去のアンケート調査との比較によって，学生の授業を観察する力や，授業協議会での取り組みに関し，学校教育実習プログラムの一定の教育効果が認められたものの，学校教育実習Ⅵに関し，一週間という実習期間の短さや，副専攻教科の内容理解に関する不安など，幾つか改善されるべき課題が残されていることが分かった。

また，本稿では，教育実習で育まれた他の側面（例えば，「授業構成力」や「授業展開力」，「教材分析力」などのより実践的な側面）に関し，過去のアンケート調査との比較という制限から，ほとんど検証することができなかった。今後，継続的なデータを蓄積するとともに，アンケート項目を調整し，教育実習プログラムのさらなる検証・改善を進めることが，残された重要な課題であると考えている。

注

1）回答にあたっては，設問ごとに次のような５つの選択肢を提示した上で，最も当てはまるものを一つ選択させた。

問１：「とてもなりたい」，「なりたい」，「迷っている」，「あまりなりたくない」，「全くなりたくない」

問２：「必ず受験する」，「おそらく受験する」，「迷っている」，「あまり受験するつもりはない」，「全く受験するつもりはない」

問３：「とても魅力を感じる」，「魅力を感じる」，「どちらともいえない」，「あまり魅力を感じない」，「全く魅力を感じない」

2）表中の問２，問３における１年次のデータがないのは，平成16年度および17年度入学生に対し，これらの項目を１年次に調査していないことによる。

参考文献

1）畑克明・森本直人（2005）「教育体験活動（「1000時間体験学習」）の概要」『島根大学教育臨床総合研究』第４巻，1-12頁.

2）川路澄人・平野俊英・森本直人・秦光司・高旗浩志・間瀬茂夫（2005）「１年次における学校教育実習カリキュラムの企画と実施，その改善―学校教育実践研究Ⅰ・学校教育実習Ⅰのカリキュラム構築とその実際を通して―」『島根大学教育臨床総合研究』第４巻，31-46頁.

3）高旗浩志・森本直人・秦光司・川路澄人・間瀬茂夫・平野俊英（2005）「１年次における学校教育実習プログラムの評価と検証―学校教育実践研究Ⅰ・学校教育実習Ⅰを対象として―」『島根大学教育臨床総合研究』第４巻，47-64頁.

4）間瀬茂夫・石上城行・嘉賀收司・川路澄人・齋藤英明・高旗浩志・秦光司・森本直人（2006）「２年次における学校教育実習カリキュラムの設計と実際―学校教育実習Ⅱを通したファカルティ・ディベロップメント―」『島根大学教育臨床総合研究』第５巻，37-53頁.

5）川路澄人・森本直人・小川巌・大谷修司・石上城行・岩田耕司・嘉賀收司・加藤寿朗・齋藤英明・高旗浩志・長澤郁夫・秦光司・平野俊英・廣兼志保・間瀬茂夫（2007）「「1000時間体験学修」における体系的な学校教育実習の再構築（５）―「学校教育実践研究Ⅱ」と「学校教育実習Ⅲ・Ⅳ」の構想と実際―」『平成19年度日本教育大学協会研究集会発表概要集』，18-19頁.

6）高旗浩志・岩田耕司・森本直人・小川巌・大谷修司・石上城行・嘉賀收司・加藤寿朗・川路澄人・齋藤英明・長澤郁夫・秦光司・平野俊英・廣兼志保・間瀬茂夫（2007）「「1000時間体験学修」における体系的な学校教育実習の再構築（６）―「学校教育実習Ⅲ・Ⅳ」の教育効果と学生の教職志向の経年変化―」『平成19年度日本教育大学協会研究集会発表概要集』，20-21頁.